

令和6年度

高知県高校生防災サミット 報告書

私たちから未来に紡ぐ ～高校生から広げる防災～



阪神・淡路大震災から、30年経ちました

本県で想定される全ての自然災害について学ぶ機会をつくり、総合的に災害を捉えられるよう津波サミットから防災サミットへ名称を変更しました

高知県教育委員会

目次

1. 黒潮宣言	1
2. 「高知県高校生防災サミット」の取組	
一連の取組	3
3. 令和6年度 高知県高校生防災サミット	
開催要項	6
参加校一覧	8
高知県教育長挨拶	9
高知県知事挨拶	11
尾崎正直衆議院議員挨拶	13
実践校取組発表	15
県外実践校取組発表	19
講演（TEAM大川 未来を拓くネットワーク 代表 只野哲也 氏）	
	21
代表生徒挨拶	30
アンケート結果・感想	31

The Kuroshio Declaration

To commemorate the establishment of “World Tsunami Awareness Day” at the United Nations General Assembly, for the past two days, on 25th and 26th of November 2016, we have gathered at Kuroshio Town, Kochi, which is predicted to suffer from significant damage by a devastating tsunami the Nankai Trough earthquake may cause.

Natural hazards bring severe damage across the world, and many people face having to recovery their communities as a result. Although the diversities in countries and regions we live in may create differences in disasters caused by natural hazards we face and our approaches to disaster risk reduction, we all share the common goal of saving all human lives from disasters.

Today, as high school students from around the world, we have learned about what we should and can do to achieve our goal and to contribute to recovery of disaster affected areas.

We hereby declare that we will continue to make our best effort to understand the risks and effects of tsunamis, to pass onto our predecessors’ experiences and knowledge of disaster mitigation and risk reduction to future generations, and most importantly, to save people’s lives from tsunamis and other hazards.

- 1 We will learn.
 - We will obtain correct knowledge on the mechanisms of natural hazards, and the history of damage and disasters so that we can enhance our understanding of—natural hazards and their risks.
 - We will learn and study knowledge, skills, and actions that are useful for disaster risk reduction to save people’s lives.
 - We will learn how to face hazards and how to live our lives from people who have experienced such disasters.
 - We will utilize technology to enhance our learning.
- 2 We will take actions.
 - We will keep reminding people of the risk of disasters caused by natural hazards and constantly carry out educational activities to raise people’s awareness of disaster risk reduction.
 - We will recognize ourselves as people who offer help to others instead of people who receive help and we will actively participate in volunteer activities that consider others.
 - We will contribute to community development as members of the community through activities such as proposing actions for disaster risk reduction to the local community and national and local governments.
- 3 We will create.
 - By utilizing our acquired knowledge and skills, we will create useful tools and systems for disaster risk reduction for all kinds of people.
 - We will create global and regional networks of high school students to learn together and cooperate with each other so that we can live together with our friends in the world.
 - We will make use of our wisdom and vitality as future leaders for disaster risk reduction. We will not only revitalize the development of local communities, but also contribute to making our cities and countries more resilient to hazards for the sake of ourselves and children in the future.

While appreciating the blessings of nature and understanding the risks that nature sometimes brings about disasters, we will love and live with nature without fearing those risks.

November 26, 2016

High School Students Summit on “World Tsunami Awareness Day” in Kuroshio

黒潮宣言

国連総会において「世界津波の日」が制定されたことを記念し、私たちは、世界 30 カ国から、2016 年 11 月 25・26 両日、南海トラフ地震による甚大な津波被害が想定される高知県黒潮町に集まりました。

世界各地で自然災害が大きな被害を及ぼし、多くの人々が復興に立ち向かっています。

私たちの住む国や地域は多様であり、発生する自然災害や、防災に対する取組も様々ですが、すべての人々の命を守りたいという願いは同じです。

今日、世界の友と、災害から人々の命を守るために、そして被災地の復興のために、私たちは何をすべきか、また、どのような取組ができるのかを学び合いました。

このサミットを通じて、世界での津波リスクと津波による甚大な影響を認識し、先人たちの防災・減災の志を後世に伝える責務を引き継ぎ、津波災害をはじめとする災害から一人でも多くの尊い命を守るため、できる限りの努力をする決意をここに宣言します。

1 私たちは学びます。

- 自然災害への理解を深めるため、それらの仕組みや被害、過去の歴史を正しく学びます。
- 人々の命を守るため、防災に役立つ知識や技術・取組を学び、研究します。
- 被災した方々から、私たちはどのように災害に立ち向かい、どのように生きるべきなのかを学びます。
- テクノロジーを駆使して学びます。

2 私たちは行動します。

- 自然災害の記憶の風化を防ぎ、防災意識向上のための啓発活動を絶やさず行います。
- 助けられる人から助ける人となる自覚を持ち、人々の心に寄り添うボランティア活動を積極的に行います。
- 防災への取組を地域社会と行政に提案するなど、地域社会の一員として地域づくりに参画します。

3 私たちは創ります。

- 学び得た知識や技術、若者らしい斬新な発想をもって、あらゆる人の防災に役立つ物や仕組みを創造します。
- 世界の友と生きるため、地域や国を越え、共に学び、協力しあう高校生間のネットワークを創出します。
- 次代を担う防災リーダーとして知恵と行動力を発揮し、私たちと未来の子ども達のために、地域の活性化はもとより、災害に強い街や国づくりに貢献します。

そして、自然の恵みを享受し、時に災害をもたらす自然の二面性を理解しながら、その脅威に臆することなく、自然を愛し、自然と共に生きていきます。

2016 年 11 月 26 日

「世界津波の日」高校生サミット in 黒潮

「高知県高校生防災サミット」一連の取組

令和5・6年度実践校

安芸高校、山田高校、高知農業高校、高知海洋高校

令和6・7年度実践校

室戸高校、高知東工業高校、大方高校、宿毛工業高校

第1回学習会
6月9日(日)

内容

土砂災害及び最先端の津波防災、能登半島地震について学ぶ

講師

県防災砂防課
京都大学矢守教授
九州大学杉山准教授

被災地訪問 in 神戸
8月1～3日

内容

人と未来防災センター、神戸震災メモリアルパーク他での震災学習。舞子高校との交流学习

第2回学習会
8月19日(月)

内容

避難所運営について講義とゲームを通じて学ぶ

講師

さんすい防災研究所 山崎代表

「世界津波の日」高校生サミット in 熊本
10月22～24日

内容

自校での防災活動を英語で発表し、海外の参加者と一緒に防災について討論。レセプションで参加者と交流



第1回学習会



被災地訪問



第2回学習会

令和6年度
高知県高校生
防災サミット

実践校

自校での防災活動の実践

取組を発表

「高知県高校生防災サミット」(参集とオンライン方式を併用するハイブリッド方式により開催)

本年度の「高知県高校生防災サミット」は令和6年11月16日(土)に高知県庁正庁ホールで開催しました。43校から高校生及び教職員が参加し、関係者も含めると合計170名が参加しました。

本年度のサミットより、津波だけにとらわれず、本県で想定される全ての自然災害について学ぶ機会をつくり、総合的に災害を捉えられるよう名称を「津波サミット」から「防災サミット」と改め、地震や津波以外の災害についても各実践校の実態に即して総合的に学び、実践してきました。

今回のサミットでは、令和5・6年度の実践校の取組発表、県外高等学校(兵庫県立舞子高等学校、宮城県気仙沼向洋高等学校)の取組発表、サミットOB山崎健司さんによる講話、小学生のときに東日本大震災で被災された只野哲也さん(未来を拓くネットワーク Team 大川 代表)の講演並びにグループワークを実施しました。最後は生徒代表として山田高校の松浦岳飛さんから「参加した高校生がこの学びを伝えれば、誰も取り残さないという難しい目標にも近づくことができる」とサミットを締めくくりました。

【只野さんによる講演】

只野さんからは「東日本大震災から学び、仲間と共に未来を描く」というテーマでご講演いただきました。震災前後の大川小学校の様子や出来事、震災後の子どもたちの状態と支援、現在の活動やTeam大川の今後についてお話いただきました。終了後の感想には「生きるためにどうするか、どう対策するかには私は焦点をあてていましたが、生きるだけではなく、どう生きて、どう過ごすかが、考えられていないことに気づきました。」等、来る南海トラフ地震のことを考えながら、講演の内容を真摯に受け止める参加者の姿が見られました。



高知県高校生防災サミット第1回学習会（6月9日）

平成28年11月に黒潮町で日本を含む30カ国の99校、361名の高校生が一堂に会し、『世界津波の日』高校生サミット in 黒潮』が開催されたことを契機に、件では毎年「高知県高校生防災サミット」を実施しています。

今回は、高知丸の内高等学校で実践校8校の実践委員32名が集まり学習会を行いました。午前は県土木部防災砂防課 森本剛正課長から「あなたの大切なものを土砂災害から守るために」という内容で講義を受けました。

午後は京都大学防災研究所 矢守克也教授と九州大学大学院人間環境学研究所 杉山高志准教授から「ICTツールを使った最先端の津波防災学習」と「能登半島地震の被害についての解説」について講義を受け、グループワークを行いました。アプリを活用した避難訓練やその分析、また能登半島地震の揺れの性質について学習し、意見を交換しました。今後はこの学習の成果を持ち帰り、各学校での防災活動に生かしてくれることだと思います。

令和5・6年度実践校

安芸高校
山田高校
高知農業高校
高知海洋高校

令和6・7年度実践校

室戸高校
高知東工業高校
大方高校
宿毛工業高校



高知県の土砂災害について真剣に学ぶ様子



矢守先生と杉山先生に
質疑応答の時間



積極的に話し合い

高知県高校生防災サミット 被災地訪問 in 神戸（8月1～3日）

高知県高校生防災サミットの取組として、隔年で被災地を訪問しています。今年は、阪神淡路大震災で被災した神戸を訪問しました。参加者は、高知県高校生防災サミットに参加している8校のうち7校からそれぞれ代表1名の生徒が参加し、阪神淡路大震災について学び、兵庫県立舞子高等学校の生徒とお互いの防災活動について交流することで、お互いの学びを深め合うことができました。

今回の被災地訪問に参加した生徒からは「（舞子）高校に環境防災科があるということに驚いた。世界初と聞き、とても興味深かった。」「交流学習を通して、高校生ができることを考える良いきっかけになった。」「将来の夢と防災を結びつけることは自分のためにも周りの人のためにもなると思うので、しっかり考えて結びつけていこうと思いました。」等、交流や体験等を通して、新しい価値や考えに出会うことができたという感想が寄せられました。3日間を通じて防災リーダーとしての意識の高まりが感じられました。



人と未来防災センターでの震災学習



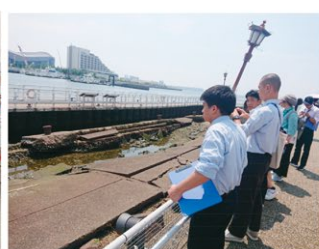
大阪市阿倍野防災センターでの
震災学習



語り部さんの話を聞く参加者の
皆さん（人と未来防災センター）



舞子校高校の生徒との交流学習



神戸震災メモリアルパークを散
策し、震災の爪痕を見学

高知県高校生防災サミット 第2回学習会（8月19日）

高知県高校生防災サミットの第2回学習会が8月19日（月）に高知県立塩見記念青少年プラザの多目的室にて行われました。

講師に、さんすい防災研究所 代表 山崎水紀夫氏を迎え、「命をつなぐ避難所運営」と題して、災害時の避難所の実態と運営上の留意点についてお話をいただきました。参加した高校生たちは、避難所運営で直面する様々な事態について、スピード感のある判断の重要性などを学びました。

また、午前と午後にわたり「避難所運営ゲーム（HUG）」を体験しました。学校で避難所運営を任されたという設定で、次々とやってくる避難者と課題を、グループで協議しながら頭を悩ませつつも、対応について判断していきました。

続いて、高知県立山田特別支援学校の橋田教諭から、避難所生活で支援が必要な人々に対する配慮についてご助言をいただきました。その後のグループワークでは、避難所で高校生の立場でもできることなどを話し合いました。「私たち、○○できます！」とアピールし、他の人が頼りやすい雰囲気を作るなど、共助の視点をもった意見が多く出されました。この学習会を通して、発災後にどのようなことが必要になってくるのか、各々でイメージする姿が見られました。



講師の山崎氏の話聞く高校生（写真上）避難所運営ゲームについて説明する山崎氏（写真下）



避難所運営ゲームで協議する高校生



引率の先生方も避難所運営ゲームに挑戦しました



橋田教諭からご助言をいただきました



グループワークで話し合ったことを発表しています

「世界津波の日」2024 高校生サミット in 熊本（10月23～24日）

令和6年10月23・24日と2日間にわたり、『世界津波の日』2024 高校生サミット in 熊本が熊本城ホールを会場に行われました。高知県からは室戸高校、大方高校、高知国際高校から3名ずつ参加し、日本各地、世界各国の高校生と防災について共に学びを深めました。日本からは、北海道や宮城県、石川県などからも高校生が参加し、海外からはカナダ、フランス、中国、韓国、インド、オーストラリア、フィジーなど、40以上の国や地域から500人以上が参加しました。

23日の初日は、15の分科会に分かれて協議が行われました。それぞれ、「災害の予防」「災害リスクの低減（減災）」「創造的な復興」と分科会ごとにテーマがあり、活発に意見を交換していました。大方高校と高知国際高校は「災害の予防」、室戸高校は「災害リスクの低減（減災）」をテーマとした分科会に参加しました。各分科会では、各校の取組発表後、グループに分かれ、英語でコミュニケーションをとりながら、アクションプランをまとめていました。その後、開会式が大ホールで行われ、文部科学大臣等による来賓挨拶や内閣総理大臣からのビデオメッセージ、そして高校生による歓迎の演奏があり、盛大な幕開けとなりました。

24日の二日目には記念植樹と記念碑の披露が行われました。その後、大ホールで総会・閉会式が行われ、総会では初日のアクションプランを各分科会の代表者が発表しました。どの発表でも「コミュニケーション」「気づき（自覚）」「教育」「準備（備え）」などのキーワードから、災害の怖さやリスク、避難すれば助かることなど、SNS等を活用し啓発していく必要があるとまとめられていました。

高知県から参加した高校生たちは、他国の高校生や他県の高校生と親交を深め、別れを惜しむ姿もありました。世界各地に防災について学ぶ仲間がいると知れたことは、大きな財産となったと思います。



令和6年度「高知県高校生防災サミット」開催要項

私たちから未来に紡ぐ～高校生から広げる防災～

1 趣 旨

平成28年11月、本県の黒潮町で日本を含む世界30カ国の99校、361名の高校生が一堂に会し、『世界津波の日』高校生サミットin黒潮が開催され、若き高校生たちが防災リーダーとしてそれぞれの国や地域で活動していく決意を表明した「黒潮宣言」が採択されました。その黒潮宣言に基づき、今後、高知県の未来を担っていく高校生が防災リーダーとして成長し、活躍することを目的に開催します。

2 主 催 高知県教育委員会

3 日 時 令和6年11月16日（土） 10：00～15：30

4 会 場 高知県庁正庁ホール（〒780-0850 高知市丸ノ内1丁目2番20号）

5 開催方法 参集方式とZoomによるオンライン方式の併用で実施

6 参加者 高知県内の高校生及び教員、学校教育関係者、防災関連機関担当者 等

7 日程及び内容

時 間	高知県庁 正庁ホール
9：30	受付開始
10：00	開会 教育長 挨拶 高知県知事 挨拶 尾崎正直衆議院議員 挨拶
10：20	実践校の取組発表 安芸高等学校、山田高等学校、高知農業高等学校
11：00	休憩
11：10	実践校の取組発表 高知海洋高等学校
	県外高等学校の取組発表 ・兵庫県立舞子高等学校 ・宮城県気仙沼向洋高等学校
11：50	高知県高校生津波サミット0B講話 （一社）高知県東部観光協議会 山崎 健司 氏
12：00	昼食
13：00	講演 「東日本大震災から学び、仲間と共に未来を描く」 TEAM 大川 未来を拓くネットワーク 代表 只野 哲也 さん ※グループ協議あり ※途中休憩あり
15：20	閉会 ・代表生徒挨拶

8 その他

- 昼食は会場で食べることができます。近隣に飲食店等が少ないため、昼食は各自でご持参ください。
- 悪天候等により、やむを得ず中止する場合は、高知県教育委員会事務局学校安全対策課ホームページに、前日の17時までに掲載します。

9 問い合わせ先 高知県教育委員会事務局 学校安全対策課 学校安全担当 上岡、西脇 TEL:088-821-4533 FAX:088-821-4546

令和6年度 高知県高校生防災サミットについて

■実施日時

日時 : 11月16日(土) 10:00~15:30(受付9:30~)

場所 : 高知県庁正庁ホール

開催方法 : 参集方式とZoomによるオンライン方式

講師 : Team 大川 未来を拓くネットワーク 代表 只野 哲也(ただの てつや)さん

■実施方法について

- ・各学校の参加者数は8名以内(8名を超える場合は学校安全対策課と要相談)。
- ・各学校必ず一名以上の参加をお願いします。(学校行事等と重なっている場合を除く)
- ・なるべく**参集での参加**を推奨します。
- ・実践校について実践委員は全員参集、実践委員以外の参加も可。
- ・特別支援学校は教職員のみ参加も可とします。
- ・東部、西部から大型バスを運行します。

	運行ルート(学校)
東部	【7:00 発】室戸高校前(室戸)→【8:00 着 8:10 発】安芸球場前駅(中芸・安芸)→【8:50 着~9:00 発】高知農業高校(城山、嶺北、山田、高知農業、東工業、岡豊)→【9:45 着】高知県庁
西部	【6:50 発】宿毛工業高校(宿毛、宿毛工)→【7:10 着~7:20 発】JR 中村駅(清水、中村、幡多農業、西土佐分校)→【7:35 着~7:45 発】黒潮町役場(大方)→【8:35 着~8:45 発】窪川高校(窪川、四万十)→【9:45 着】高知県庁
各使用登録車	須崎総合、佐川、梶原、海洋、高岡、春野、伊野商業、国際、高知北、小津、丸の内、吾北分校、追手前、高知工業、高知東 ※県立特別支援学校

■講師紹介

東日本大震災で津波に襲われた石巻市立大川小学校は児童74人、教職員10人が亡くなる大惨事となりました。講師である只野哲也さん(当時小学5年生)も津波にのめれましたが、一命を取り留めました。一方で家族を失い、環境が激変する中、只野さんは子どもたちの思いを背負って講演などで活動されています。

その後、震災遺構として被災した旧校舎を保存する活動を行い、現在は「TEAM 大川未来を拓くネットワーク」を発足させ全国各地の講演や大川小学校の案内、誰もが安心して集うことのできる新たなコミュニティの創出など、未来に向けて活動されています。

講演では、

- ① 「震災前後の大川」: 大川小学校の出来事
- ② 「震災後のこども」: 学習支援、メンタルケア、大川小学校 校舎保存活動
- ③ 「共に未来を拓く」: 今の活動紹介、コミュニティづくりへの取り組み

などについてご講演いたく予定です。

■令和5・6年度実践校(発表校)

安芸高等学校、山田高等学校、高知農業高等学校、高知海洋高等学校

■令和6・7年度実践校

室戸高等学校、高知東工業高等学校、大方高等学校、宿毛工業高等学校

令和6年度「高知県高校生防災サミット」参加校一覧

【実践校:8校】

令和5・6年度実践校

1	安芸高等学校
2	山田高等学校
3	高知農業高等学校
4	高知海洋高等学校

令和6・7年度実践校

5	室戸高等学校
6	高知東工業高等学校
7	大方高等学校
8	宿毛工業高等学校

【参加校:35校】

1	中芸高等学校
2	嶺北高等学校
3	城山高等学校
4	岡豊高等学校
5	高知東高等学校
6	高知工業高等学校
7	高知追手高等学校
8	高知追手前高等学校吾北分校
9	高知丸の内高等学校
10	高知小津高等学校
11	高知北高等学校
12	高知国際高等学校
13	春野高等学校
14	高岡高等学校
15	須崎総合高等学校
16	佐川高等学校
17	窪川高等学校
18	梶原高等学校

19	幡多農業高等学校
20	幡多農業高等学校
21	中村高等学校
22	中村高等学校 西土佐分校
23	清水高等学校
24	山田特別支援学校田野分校
25	高知江の口特別支援学校
26	高知江の口特別支援学校 医大病院分校
27	高知江の口特別支援学校 国立高知病院分校
28	高知ろう学校
29	高知若草特別支援学校
30	高知若草特別支援学校 土佐希望の家分校
31	高知若草特別支援学校 子鹿園分校
32	日高特別支援学校
33	日高特別支援学校 高知みかづき分校
34	日高特別支援学校 しんほんまち分校
35	中村特別支援学校

高知県教育長 挨拶

令和 6 年度「高知県高校生防災サミット」の開催にあたり、主催者として一言、ご挨拶申し上げます。

今年は、まさかと誰もが思いました 1 月 1 日に能登半島地震が発生しました。尊い命が失われる非常に辛く悲しいスタートでありました。以後、線状降水帯が各地で発生し、大雨やそれによる土砂崩れなどの甚大な被害がもたらされています。本県におきまして、8 月 8 日には日向灘沖地震による南海トラフ地震臨時情報「巨大地震注意」が発表されたことは、まだ記憶に新しいところです。いつ、どこで、どのような災害が発生してもおかしくない状況にあると思わざるを得ません。

さて、8 年前の平成 28 年 11 月、黒潮町におきまして日本を含む世界 30 か国 361 名の高校生が一堂に会し、初めて「『世界津波の日』高校生サミット」が開催されました。その時、災害から一人でも多くの尊い命を守るため、「学ぶこと」「行動すること」「創ること」の 3 つを柱に防災活動を行う決意「黒潮宣言」がまとめ上げられました。本県では、この宣言に基づき、毎年高校生が主体となって防災学習や被災地訪問を継続し、災害の仕組みや避難の在り方、避難所生活の留意点等を学んでいます。また、災害時における状況に応じた的確な行動が取られるよう、防災士の資格取得に励んでいる高校生が多くいます。さらに「『世界津波の日』高校生サミット」への参加を通し、他の地域の多くの高校生同士のネットワークを創ってきました。

今年度は、8 校の防災教育実践研究校と 40 名の高校生実践委員が中心となって、こうした防災学習に取り組んでいます。その中で「他国や他の地域で発生する自然災害であっても、それを我が身に置き換え、その時、自分ならどのように行動すべきかを考えるようになった」といった声や、「避難所運営のワークショップに参加し、被災した方々の苦悩と同時に運営側の悩みに触れ、様々な困難点を理解できるように思う」といったそういった声も聞かせていただいています。

また、実践校におきましては、地域の防災イベントへの参加や地域の小中学校

等への出前講座を行うなど、学校内だけでなく地域と連携した活動も展開されています。

本日のサミットは、そうした実践校における取組成果を共有し、防災について共に考え、学び合う場として開催するものです。そして、昨年度までは「高知県高校生津波サミット」として開催しておりましたが、県内で想定される台風や大雨等も含め、自然災害を総合的に捉えることとし、今年度から「高知県高校生防災サミット」として開催することとしました。

本サミットへの参加を通じて、ご家族や友人、地域の方たちの命を守る人となるために、今、何を学び、何ができるようになることが必要かを真剣に考え議論し、明日からの行動につなげてくださることを願うところであります。

この後の日程では、実践校による取組発表に続き、兵庫県、宮城県の被災地において防災活動を発展してきた、その取組発表、そして、東日本大震災で多くの犠牲を出した大川小学校で被災され、その後、地域の復興にご尽力されていらっしゃる只野哲也さんのご講演なども予定されています。実りある一日となることを期待しています。

結びにあたり、ご指導くださった各学校の先生方、ご協力をいただいております保護者、そして、地域の皆様方に改めて感謝を申し上げますとともに、ご参加の皆様方の今後ますますのご活躍を心からお祈りし、私からの挨拶とさせていただきます。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

高知県教育長 長岡 幹泰

高知県知事 挨拶

本日は、令和6年度の「高知県防災サミット」にこんなにたくさんの方々が集まっていたいただき、心より嬉しく思います。

今年の正月に能登半島で大きな地震がありました。私も6月に現地に行って状況を見てきましたが、中山間地域では人口が減少、高齢化がネックとなっていて、地震の被害が非常に大きくなっています。南海トラフ地震の発生が切迫していると言われている高知県にとってもこれは他人事ではなく、同じような事態が近い将来に必ず起こると思って備えなければならないと改めて感じました。

県の行政としても、道路や水道を地震により強くする取り組みを進めています。他にも体育館に雑魚寝するのではない、もっと快適な避難所環境が求められており、様々な面で強化していかなければなりません。

しかし、風水害も含めて大規模な災害が発生した場合、行政の支援だけでは十分ではないかもしれません。南海トラフ地震のような大規模災害では、地域全体が被災し、県内全体、西日本全体が被災地となる可能性があります。そうになると、行政の支援だけに頼るのではなく、皆さん一人ひとりが自分の命を守る「自助」の取り組みが大切になります。

災害への対応には、自助、共助、公助があります。自助は自分の安全を自分で守ること、共助は地域の方々と助け合うこと、公助は行政や警察、消防、自衛隊などが支援することです。大規模災害の時には特に自助の取組が本当に重要になろうかと思います。

今日のサミットを通じて、皆さんが自分の命を自分で守ることの大切さを考え、行動していただければと思います。特に若い皆さんが防災のリーダーとして地域を引っ張っていくことが大切です。地域の高齢者の方々には「俺たちは

もう寿命が短いけん、津波が来たらそれまでや」といった、諦めを言われる方も少なからずおられますが、若い人たちが一生懸命取り組む姿を見れば、自分たちも頑張らなければならないと思うようになります。

今日は、各学校の防災の取り組みや、東日本大震災や阪神淡路大震災の経験した地域の学校での取組や被災された方の体験談を聞くことができる貴重な機会です。どうかこのサミットを有意義なものにして、皆さんが防災意識やスキルを高め、高知県が安全で安心な地域になることを期待しまして、私からのご挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

高知県知事 濱田 省司

尾崎正直 衆議院議員 挨拶

衆議院議員の尾崎正直です。今回の「防災サミット」は元々「世界津波の日」のサミットとして平成 28 年から始まり、毎年継続しているものです。取組を続けられてきた教育委員会や先生方、そして参加された高校生の皆さんの尽力に本当に敬意を表します。

今は人生 100 年時代と言われていますが、その中で皆さんはこれから 80 年ほど生きることでしょう。その中で、南海トラフ地震や地球温暖化による豪雨災害が必ずやってくると考えています。だからこそ、災害に対処するための知識を学び続けることが極めて重要です。多くの先例から学び、災害に備えるための知識を深めてください。

私も知事を 12 年間務めさせていただきましたが、災害対策において一つの型にとらわれないことが大事だと感じています。例えば、能登半島地震では震度 7 の揺れが 50 秒続きましたが、南海トラフ地震ではそれが 2 分以上続くと言われています。まずは家の耐震性や地域の耐震対策をしっかりと見直す必要があります。

津波対策も重要です。毎年行われる県民意識調査で「すぐ逃げる」が正しい答えですが、その正答率は 70%で、ほとんど改善していません。これだけ津波や地震対策が啓発されているのに、まだまだ意識が低いという現実があります。皆さんが新しい知識を得て、多くの人に啓発することが重要です。

日本の国土構造は昭和 30 年代に作られました。戦後の復興期に海のそばにたくさんのコンビナートや工業団地が作られ、その周辺に町が発展していきました。しかし、その後プレートテクトニクス理論が明らかになり、津波が繰り返し襲ってくることが分かりましたが、多くの町はその前提を考慮せずに作られています。

例えば潮江は歴史的に津波で浸水してきた場所で、戦後の復興期に都市が発展し、現在では2万人以上の方が住んでいます。全国各地で同様のことが起きており、特に西日本側に集中しています。南海トラフ地震では、コンビナートが被災し、大火災や発電所のダウンが起きる可能性があり、震災後しばらくの間、エネルギー供給や電力が途絶えるという非常に厳しい状況になるかもしれません。

能登半島地震や東日本大震災から学び、南海トラフ地震に備えるために、様々な対策を講じることが必要です。私たち大人は必死になって、そうしたことが起こらないように対策を巡らせます。皆さんは一つの型にとらわれず、様々な可能性を念頭に置いて災害に備えてください。

この防災サミットで学びを深め、災害を乗り越える力をつけ、自らや愛する人を守る人材となるよう頑張ってください。皆さんの活躍を心から祈念し、ご挨拶とさせていただきます。今日も1日、どうか頑張ってください。

衆議院議員 尾崎 正直

実践校 取組発表

令和5年度から2年間自校の防災活動に取り組んできました。その発表内容の一部を紹介します。※各校の取組発表の詳細は学校安全対策課のHPに載せています。

安芸高等学校

01 あきこう防災特別課結成

令和5年度から実践校として取組をスタート！
学習会などに参加し、他の実践校とも交流する中で、
私たちにできることを考えた。



02 私たちにできることは

災害時の避難の仕方が変わる。
新しい校舎の避難、清和校舎の避難どちらも訓練する必要がある。
来る南海トラフ巨大地震に向けて、
防災意識が高まるように、
しっかりと学び、正しい知識を身に付け、
発信していく活動を目指す。



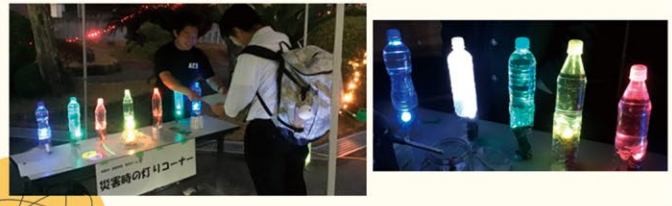
03 令和5年度の活動②

○安芸市総合避難訓練（9月3日）
→事前学習会（8月28日）、受付、発表（災害時のトイレ、消火訓練）



03 令和5年度の活動③

○放課後イルミネーションに合わせて災害時（停電時）の灯りについて展示しよう！
（12月13日から7日間）



03 令和5年度の活動⑤

○防災放送を行い防災意識を高めよう！（2月14日）



06 令和6年度の活動～学び編～

○歴史学の視点から防災を学ぶ。



07 令和6年度の活動～伝える編～

○安芸市教育の日（6月2日）に安芸第一小学校にて、4年生対象に
参観授業をさせていただきました。



07 令和6年度の活動～伝える編～

○文化祭の企画・展示⑤



↑手作りクーラー

山田高等学校

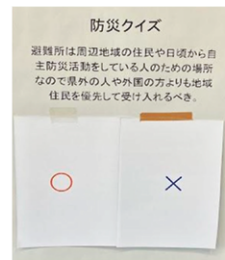
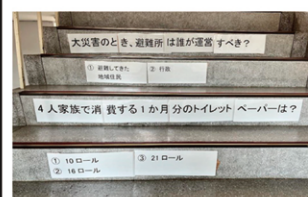
活動内容

1. 防災クイズの実施
2. 防災ワークショップの実施
3. 高知県高校生津波サミット参加
4. 山田高校一年生を対象に防災学習の実施

目的
防災知識・意識を
持った山田高校生
になる

防災クイズ

目的：生徒の知識向上



防災ワークショップの実施



東日本大震災メモリアルday2023

- ・ 2024年1月19・20日
- ・ 宮城県多賀城高等学校
→災害科学科を設置
- ・ グループワーク
- ・ ポスター発表



考察

防災ワークショップで
試食やものづくりなどの体験を行った
↓
自分ごととして捉える事ができた
▶ 防災への意識が向上

1年生対象の防災学習

【内容】

防災○×クイズ
声出し大会
スライド発表
→自分の命を守ることの大切さを伝える

東日本大震災メモリアルday2023

- ・ 2024年1月19・20日
- ・ 宮城県多賀城高等学校
→災害科学科を設置
- ・ グループワーク
- ・ ポスター発表



まとめ

- ・ 若い人の防災意識、知識はまだ不十分
→防災学習などを継続して行っていく
- ・ 自分の学びを自分の言葉で周囲に伝える
- ・ 被災地訪問の意味



取組内容

- 1 NPO法人減災教育普及協会と連携
- 2 小学校への防災出前授業
- 3 窓ガラスに飛散防止フィルム貼り



高知海洋高校の発表内容

- 高知海洋高校の取組み
- 校内の防災備蓄品の確認
- 避難場所・経路の調査
- 通学路付近の避難場所の確認

南海トラフ地震を想定した避難訓練



校内の防災備蓄品を調べてみて

- いろいろな種類がある
- 使い方がわからない
- 故障している物もある

定期的な状態チェック
使い方を生徒にも伝える

十郎谷への避難で気になること



十郎谷からグラウンド裏山へ移動してみて



土佐市役所の方に備蓄倉庫を見せていただいた

- 土佐市・宇佐自治会・海洋高校がそれぞれ倉庫を管理している



学校周辺の避難所に行ってみて

- 案内看板からのルートやかかる時間がわからないと不安
- 実際に訪れてみることの大切さがよくわかった
- 災害時に迷わずにどの避難場所へ行くべきかを判断できるようにしておくことが大切



防災サミット発表資料はこちらから
※各校の発表内容の詳細がわかります

県外高等学校 取組発表

本年度は、県外で積極的に防災活動を行っている、兵庫県立舞子高等学校及び宮城県気仙沼向洋高等学校の2校から取組発表をいただきました。その発表内容の一部を紹介します。

舞子高等学校

01 舞子高校環境防災科の紹介

阪神・淡路大震災がきっかけとなり2002年に環境防災科が誕生



01 舞子高校環境防災科の紹介

1 年生

「災害と人間」

「環境と科学」

「自然環境と防災Ⅰ」

「防災情報Ⅰ」

2 年生

「Active防災Ⅰ」

「社会環境と防災Ⅰ」

「自然環境と防災Ⅱ」

「環境と科学」

「環境防災講義」

3 年生

「卒業研究」

「人と社会」

「社会環境と防災Ⅱ」

「Active防災Ⅱ」

「防災情報Ⅱ」

01 舞子高校環境防災科の紹介

- ・日頃の授業
- ・震災メモリアル行事
- ・防災教育
- ・避難訓練
- ・課外活動



02 高校生が考える防災のかたち

- ・「高校生防災サミット」
神戸、姫路、宮城、岡山
の高校生
- ・各校の取り組みを共有
- ・防災提言を作成、発表



03 日頃の授業・活動とのつながり

- 1 災害を自分の問題として考える
- 2 災害の記憶の風化を防ぐ
- 3 楽しく防災について学ぶ
- 4 地域社会との連携
- 5 誰一人取り残さない社会の実現

03-2 長田まちあるき

- ・被害にあった長田のまちをあるく
- ・復興がどのように行われてきたのか
- ・自分のまちとの比較



03-3 出前授業（課外活動）

- ・小中学生と共に防災について学ぶ
- ・防災すごろく
- ・ワークショップや工作を通しての授業

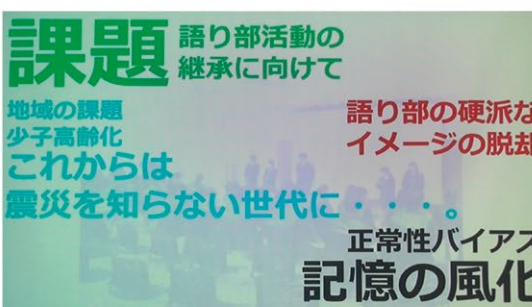
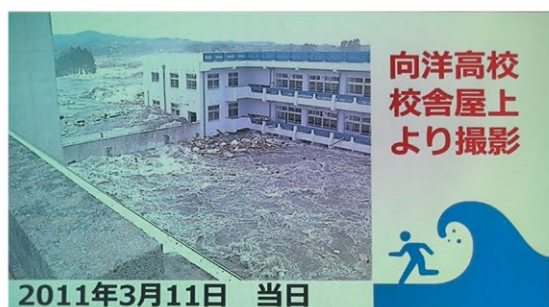


03-4 地域との連携（授業）

- ・安全マップ作り(小3)
- ・壁新聞を使った防災授業(小4)
- ・防災体験学習(小5)



気仙沼向洋高等学校



講演

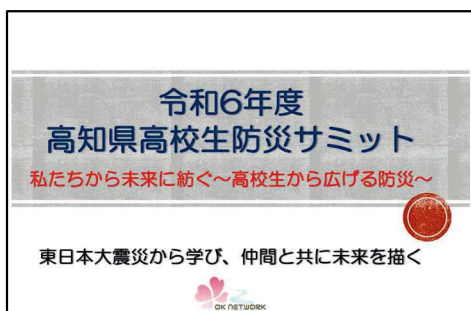
演題 「東日本大震災から学び、仲間と共に未来を描く」

TEAM 大川 未来を拓くネットワーク

ただの てつや
代表 只野 哲也 氏



●こんにちは、宮城県石巻市から来ました、只野哲也と申します。今年で25歳になります。高校は工業高校に進学し、柔道部に所属していました。東日本大震災当時、大川小学校の5年生で、津波で妹、母親、祖父を失いました。現在は「TEAM 大川 未来を拓くネットワーク」という団体で活動しております。この団体は2022年に発足し、3つの基本理念を掲げて活動しています。私は伝承部門で現地案内や全国各地での講話を行っています。



■ 基本理念

- (1) 未来のいのちを救う
- (2) こどもの笑顔を守る
- (3) みんなと向き合い心を育む



●大川小学校は、自然豊かで桜の木がたくさん植えてあり、その桜の木の下でブルーシートを敷いてお花見給食なんかもしていました。豊かな自然であったり食の恵み、あとは人の温かみが溢れる地域。そして子どもの命を真ん中に育む。まさに一つの大きな家族のようなふるさと。それが私にとっての大川の魅力だと感じています。

2011年3月11日の東日本大震災では、北上川の近くに位置するこの小学校も約10mの津波の被害を受けました。震災当時、全校児童は108人で、津波到達まで約50分の猶予がありましたが、避難の際、78人の児童が校庭に残り、そのうち74人が犠牲になりました。現在も4人の行方が分かっていません。

◇「大川の魅力」

○豊かな自然と四季折々の食の恵み

○人の温かみ溢れる地域

○地域みんなで子どものいのちを育む

『ひとつの大きな家族』のようなふるさと

2011年3月11日 東日本大震災

■震災当時全校児童108名

■当時校庭にいた児童78名中74名が犠牲
今も4名の児童が行方不明(2024年11月現在)
※当時校庭にいて助かった児童は、4名

■当時校庭にいた教職員11名中10名が犠牲
※当時校庭にいて助かった教員は、1名

震災当日、防災無線で大津波警報が発令され、石巻市の広報車が避難を呼びかけていました。また、スクールバスも待機していましたが、避難することはできず、バスの運転手も津波で亡くなりました。私は地震が起きた際、教室で帰りの会をしており、地震後に校庭に避難しました。寒い中、50 分間校庭で待機し、その後、先生の指示でなんと北上川の方へ避難を開始しました。避難中、私たちは津波に飲まれ、私は裏山の斜面に打ち上げられ、気を失いました。一緒に避難していた方がライターを持っており、それで火をおこして暖を取って、なんとか寒さをしのいで一晩明かすことができました。

大川小学校の児童たちは、学校の授業の一環で裏山に上っていた経験があり、約 1 分間で裏山に到達することができます。椎茸栽培を行い、社会科の授業の一環で裏山から校舎の絵を描くなんて授業をしていたので、裏山に上る道を知っていた子どもたちがいます。それでも裏山に逃げず、なぜか川に向かって避難をしてしまい、結果、多くの命が失われました。

よく大川小学校の災害、自然災害だから仕方ないじゃないか、千年に一度の大規模災害だから、誰も予想できなかったのではないと言われることがあります。ただ川に向かうのも 1 分、山に向かうのも 1 分。川に逃げるのも山に逃げるのも、決めるのは人です。

このことから、大川小学校で失われた命は自然災害ではなく、人災によって失われたということを念頭において、この後の話を聞いていただきたいと思います。

■ 津波到達までの状況は？

〈現場の状況〉

- 防災無線で「**大津波警報発令**」
- 石巻市の広報車が「**避難の呼びかけ**」
- 「**スクールバス**」が、校門に待機
- 津波到達まで「**約50分間**」

【POINT】大川小の出来事

大川小学校で失われたいのちは、
『**救えたいのち**』

『**自然災害(天災)**』ではなく『**人災**』

【副代表 佐藤 周作 氏より】

●私は中学校 1 年生のとき、タイでボランティア活動をしていたところ、日本でとんでもないことが起きたっていう報道があって、なかなか帰れませんでした。4 月になってようやく日本に帰ってくることができました。その流れで哲也君とご縁を頂いて、哲也君たちが中学生に上がると受験勉強が控えているので、受験勉強のところからスタッフと一緒に駆けつけたという形になります。

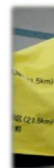
震災直後、子どもたちは生きることに精一杯で、受験勉強どころではありませんでした。避難生活での環境の変化や、大人たちの混乱もあり、子どもたちは集中力を欠き、子どもらしく過ごすことができない状況が続いていました。大人も必死で子どもに向き合う時間が取れず、子どもたちは子どもらしい時間を持つことが難しかったのです。

■ 震災後の子どもたち

■ 「生きることで精一杯」

- ・ 集中力が持続しない
- ・ 度重なる環境の変化
- ・ 言葉が出てこない
- ・ 大人に気を遣う

『**子どもでいられない状況**』



このような状況下で、明日をどう生きるかを考えることが優先されていました。

■「高校受験」に向かう子どもたち

○震災で、子どもたちが失ったもの

『言葉』 『味覚』 『自信』

『学習意欲が全く回復していない』

子どもたちが震災で失ったものが3つあります。「言葉」「味覚」「自信」この3つを失いました。避難所生活で心温かい言葉が少なく、大人たちも疲れていました。おいしいものを、本来「おいしいね」って言って食べるはずだったのが、もう本当におなか減って、もうこれは食べな

きゃいけない。でもその味が分からない。余裕も時間もない。そこからだんだん自信を失って、学習意欲が全く回復していない状況だったなというふうに思います。

心の回復に必要なバランスとして、3つの重要な要素があります。それは「あそぶ」、「たべる」、そして「まなぶ」です。この3つをまとめて、心のバランスの「ATM」と呼んでいます。これは、お金を引き出す機械のように、心の健康を維持するための大切な要素という意味です。

こどもたちの「**こころのケア**」
こころの回復に必要な「**3つのバランス**」
『あそぶ』 『たべる』 『まなぶ』

宮城から、そのとき

子どもたちを支援していた先生たちと一緒に、私は大川の方に向かって学習支援を一緒にしていましたけども、当時の記録が残っていたので、皆さんに子どもたちの様子、子どもたちの声をお伝えできればと思います。まず、1人目の子どもは「私たちは一生懸命生きています」と言いました。2人目の子どもは「私たちにとって、今の大川はアウェイです」と語っています。高校受験を控えた子どもたちの中には「どの高校にも行ける気がしないです」と感じていた子もいました。

震災直後や受験勉強の時期には、大人たちも大川での津波の検証委員会に参加していました。子どもたちは勉強に取り組む一方で、大人たちは津波の影響を検証する活動をしていたため、家族でゆっくり過ごす時間が少なかったのです。

受験勉強をしていたある日、私たちは大川小学校が壊されるかもしれないという話を耳にしました。これは大変なショックでした。なぜなら、大川小学校は私たちにとってかけがえのない思い出の場所だからです。ここには楽しい思い出しかありません。なぜなら、大川小学校で命を失った人はいないからです。避難中に命を落とした方々はいましたが、校舎内での犠牲者はいませんでした。

みんながこれを踏まえて、私たちのチームの名前でもありますけども、「未来を開く」ために、この場所はとても大事な場所なんじゃないかということになりました。

【只野 哲也 氏より】

●先ほどの話を補足します。子どもたちの心のケアにおいて、「あそぶこと」、「たべること」、「まなぶこと」のバランスが重要であることを大切にして私たちは心の回復に努めました。特に津波で多くの仲間を失った小学校6年生のクラスは大きなショックを受けていました。避難所では勉強するエネルギーはなくて、生きることによって精一杯だった彼らも、これらのバランスを大切にする事で心の回復を図り、最終的には中学校3年生の時には素敵な笑顔で楽しく勉強できるまでに回復しました。これらの回復過程で使用したワークシートを今日は体験してもらいますのでお楽しみにしてください。

★「校舎保存活動」のお話



2014年から2015年頃、受験勉強、心の回復をしている中、大川小学校の校舎を残す活動が始まりました。当時、私は中学2年生から3年生であり、多くの課題に直面していました。自分や家族、地域と向き合いその中で、高校受験に挑むというのは非常に大変なことでした。まさに私たちも皆さんの

ように高校生の頃、自分たちの思いや願いを発信してきました。特に2015年3月8日に行われた大川小学校の校舎保存を巡る意見交換会と住民投票が校舎を残すことに大きな影響を与えました。大川地区というのは、一つの大きな家族というように、本当に隣近所との関係もすごく熱いものもあったし、お父さんお母さん同士もすごく仲がいい。そんな地域だったので、同級生や目の前に亡くなった同級生のお父さんお母さんが泣きながら、「校舎をもう見たくない。見るのが辛い。壊してほしい」というところを目の前にして、当時中学3年生だった私は、未来づくり、未来の子どもたちのためにも校舎を残したいんだという自分たちの願いを表明しました。

この経験を通じて、子どもたちが防災や町づくり、遺構保存活動に関わる重要性を実感し、今後もその意義を広めていくことの必要性を強く感じています。

校舎保存に向けた「意見表明」

- ・「**母校**」を遺すために、
『**チーム大川**』を結成。
- ・全国各地で意見表明を展開。
(期間：2014年～2015年)

■地区住民の意見交換と住民投票

- ◎**2015年3月8日(日)**
…大川地区住民による、
「**校舎保存を巡る意見交換会**」
- ◎チーム大川の意見表明を実施
- ◎**大川小学校保存に大きく影響**

【顧問 佐藤 秀明 氏より】

●私は哲ちゃんが小学校5年生の時に大川支援に入りました。大川小学校では74人の子どもたちが亡くなっています。どうことが起きていたのか。行き残った子どもたちの対応を誰もしていなかったんです。びっくりしました。僕たちは支援チームを作ってサポートに入りました。

私は宮城県で高校教員を辞め、困難を抱える子どもたちの支援活動を行ってきました。特に災害時の支援にも力を入れており、新潟中越地震やスマトラ沖地震でも子どもたちの居場所作りを行ってきました。大川小学校の震災後、子どもたちがどんな思いでいるのか知りたくて支援に入りました。生き残った子どもたちは大きなダメージを受け、言葉や自信を失っていました。私たちは彼らのために言葉の回復を目指し、言葉のワークを始めました。

ワークシート ※実際にグループワークで実施

1	〇〇の	
2	〇ね	
3	〇〇〇り	
4	〇〇お	
5	〇〇〇み	
6	〇〇〇ま	
7	〇〇み	
8	〇そ	
9	〇〇〇〇う	
10	〇〇の	

その①
〇に文字をいれて
言葉をつくろう

その②
10個の項目に
共通する漢字を
□入れてみよう

【別所 功一 氏】

●私は現在23歳で、宮城県仙台市出身です。東北学院大学法学部の2年生で、震災当時は小学校4年生で家にいました。震災後、小中高で不登校を経験し、農業や保育園訪問などをしていました。母が被災地の学習支援に関わっていたことで、哲也君と出会いました。哲也君の「自分のふるさとを復興したい」という思いに共感し、現在Team大川の一員として活動しています。震災について改めて向き合い、勉強しながら、音楽部門で活動しています。

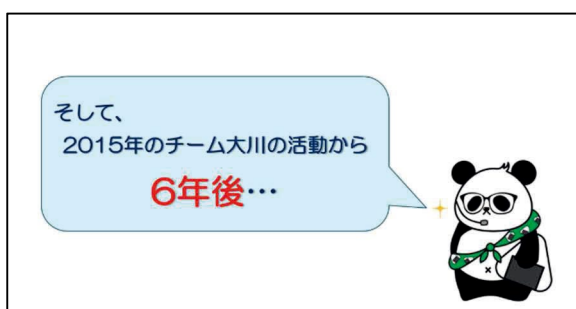
法律を学び、将来的には Team 大川の顧問弁護士を目指しています。今後も Team 大川の活動を通じて、震災や子どもたちの人権について共に考え、活動していく予定です。皆さんとの関わりを大切にしたいと思います。



(チーム大川が会場で演奏してくれました)

【只野 哲也 氏】

●2015 年に大川小学校の校舎が保存されて、いったんは私たちの活動目的が達成されました。でも、2021 年の 7 月に震災遺構として一般公開が始まった後も、まだまだ課題が残っています。



例えば、校舎をどうやって維持管理していくか、追悼の場の整備ですね。多くの子どもたちと先生方が亡くなった場所に、慰霊碑や憩いの場がまだなくて、そのまま放置されているんです。さらに、次の世代の担い手の育成も大きな課題です。高校生たちが自分の言葉で大川小学校の出来事を語れるようにすることが大切です。そうした課題を解決するためには、自分の良さを活かし、仲間と共に心を育む新たな居場所やコミュニティを作ることが重要です。そこで、「おかえりプロジェクト」と「コミュニティデザインプロジェクト」を紹介したいと思います。

「おかえりプロジェクト」は、大川小学校で毎年お盆の時期に開催されるイベントで、若

【課題】『校舎をどの様に遺すか』

- 校舎の維持管理
- 追悼の場(整備)
- 担い手の育成



い世代が安心して帰れる場所を作ることを行っています。2022 年 8 月に発足し、遊びや食事、学び、働く機会を提供することで、若者が自分の良さを活かして成長できる居場所を提供します。「こころのつばさ」の歌詞に表現されたこのプロジェクトは、何度でも行きたくなる、笑顔溢れる場所を目指しています。

一番最初の 2022 年のなんですけど、この紙灯籠のメッセージは、大方中学校の生徒さんが書いてくれたものです。1 回目の時、大方中の生徒さんたちが、それぞれの今夢中になっていることとか、これから挑戦したいこと、自分の好きな言葉、漢字一文字で、何でもいので絵でもいいし、言葉でもいいし表してくださいということで、未来へのメッセージと題して、頂きました。全国各地、講話をする先々の皆さんの協力を頂いて、それを大川に集めて紙灯籠の明かりにして灯すというのが「おかえりプロジェクト」のメインの取組になっています。四つ葉のクローバー中庭や蓮ランタンとして展示します。地元の人々もワークショップで制作に参加し、お盆の時期に大川で静かにお祭りを行います。

「おかえりプロジェクト」

【開催時期】 毎年お盆の時期にあわせ開催

【会 場】 大川小学校 (石巻市震災遺構)

【目 的】 「仲間が安心して集える場」



『また来たい!!』と感じてもらえる場

『笑顔あふれるふるさと』にしたい!!

仲間から寄せられた「紙灯籠」

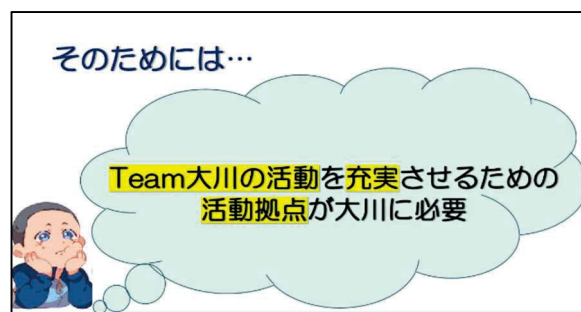
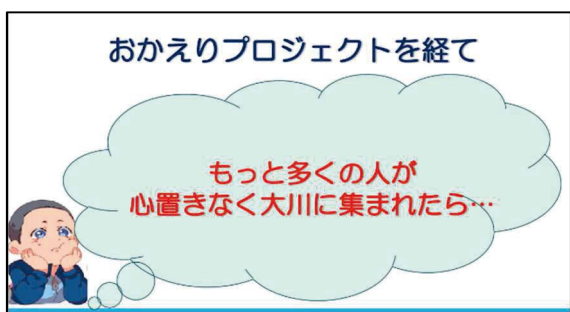
高知県 黒潮町立大方中学校 (第 1 回)





他にも明るい時間から楽しめるように、いろんなイベントをしています、これは合唱です。ここでも功一君や秀明先生が音楽を演奏しています。手前の素敵なお家族が写っていますが、右側の女性の方、この方は実は前半でご紹介した当時小学校 6 年生。生きることと精一杯と言っていた当時小学校 6 年生の僕の 1 個上の先輩です。彼女と一緒に活動していた頃から、いつかメッセージに「パートナーが見つかって、自分に子どもができたときには、その子を連れて来て、お母さん、ここで勉強したんだよ」というような話をいつかしたい、という話を僕は中学校の頃からしていました。その未来が 13 年越しにもう実現することができたという素敵な 1 枚になっているので、ちょっと紹介させていただきました。

「おかえりプロジェクト」の最終的な目標は、命を育むということです。大川小学校は悲劇の場所として、すごく色濃い場所になってしまいました。本来大川小学校が伝えるべきところは、命や家族、生きることについて考える場所だと思っています。プロジェクトを通じて、地域の子どもたちや石巻だけでなく宮城県内の高校生が新たなつながりを作り、命の大切さを感じられる場所にしたいという私の思う「おかえりプロジェクト」のゴールだなというふうに考えています。



「おかえりプロジェクト」を通じて、大川に多くの人が集まれるようにしたいと考え、Team 大川のメンバーは活動拠点が必要だと感じました。そこで去年の5月から「コミュニティデザインプロジェクト（CDP）」を始めました。大川小学校周辺は今、非居住区域と言われていて、災害危険区域という場所に指定されました。学校、児童福祉施設、宿泊施設、そ



ういったものを建てちゃいけないよ、住んじゃいけないよっていう場所が、大川小学校の周辺の状況です。令和5年度、年間8万人の方が大川小学校を訪れています。車じゃないと行けないところに8万人の方がいらっしやっている。なかには、地元のものを買って地域に還元したいと思っている方もおります

けれど、現実自販機2つしかない。地域経済が回るはずがないというような状況になっています。このプロジェクトの目的は、災害危険区域に指定されている大川小学校周辺を活性化し、地域の過疎化や人口流出といった社会問題にも取り組むことです。また、若い世代が地域活性化に貢献できる取り組みにしたいと考えています。

活動拠点の土地を石巻市から10年間借り、その土地で様々な計画や活動を進めています。さらに、私はアメリカに行き、現地の日本人に僕の被災体験とかプロジェクトの思いや計画をプレゼンしました。なんと翌月には、わざわざ海を越えて大川に来てくださいました。もちろんお金も必要なので、大きく資金の協力をし

◇「CDP」とは？

- ①誰もが安心して立ち寄ることのできる「憩いの場」となる取り組み。
- ②災害危険区域/地方の過疎化など「社会問題」に向き合う取り組み。
- ③若い世代が自分のよさを活かし、「地域活性化」に貢献する取り組み。

てほしいと思い、情熱を伝えたところ、目的の半分近くの1千万を今なんとか獲得できております。建物の協賛も得て、去年の12月にはコンテナを使った現場事務所が完成しました。このように、大川小学校と借りた土地に現場事務所を設け、今後も地域活性化を目指して活動が続いています。

今後の空間づくりについてお話しします。まず、今年と来年で事務所周辺に飲食や物販スペースを作る計画を立てています。その後は、徐々にエリアを広げていきたいと思っています。そして、桜の木を植えて、お花見をしながらご飯を食べるようなイベントも考えています。大川小学校に来て、五感でその魅力を感じられる場所を作りたいんです。イメージとしては、コンテナが建って桜に囲まれた場所を目指しています。これにより、大川小学校に新たな象徴を作り出し、地域の魅力を引き出す「コミュニティデザインプロジェクト」に取り組んでいます。

災害後に命を救うだけでなく、救った命を育む、心を育むことも大切にしたいと考えています。ここまでの活動の原動力は仲間や家族の協力、覚悟や勇気、信念と情熱が必要ですが、それがあからこそ多くの人に関わり、チームとして一人では成し得ないことができるんです。みんなで未来を拓いていくという目標を持ち、活動していくことが必要だと感じました。

午前中の講話で「逆境を楽しむ」という話がありましたが、私たちも逆境を乗り越え続けています。新たな壁が現れても、それを楽しんで挑戦し続けるという点で、私たちの活動と皆さんが向き合っていることには繋がるものがあるなと感じました。



「大川に新たな象徴をつくる」

- ① <あそぶ> 【子どもたちが安心して遊べる空間】
- ② <たべる> 【地元の食材を活かした飲食提供】
- ③ <まなぶ> 【東日本大震災に学ぶ安全管理】
- ④ <はたらく> 【若者が働ける新たな雇用の創出】

【POINT】活動の原動力

仲間と家族
覚悟と勇気
信念と情熱

『黒潮町宣言』より抜粋(2016年11月26日)

自然の恵みを享受し、
時に災害をもたらす自然の二面性を理解しながら、
その脅威に臆することなく、
自然を愛し、
自然と共に生きていきます。

代表生徒 挨拶

皆さん、こんにちは。山田高校の松浦岳飛です。本日は、皆さんと共に学び、楽しい時間を過ごすことができました。ありがとうございます。この2年間、防災について学んできたことは非常に充実した経験となりました。高校入学前は防災について深く考えたことはありませんでしたが、山田高校の実践委員として活動する中で、地震が発生したらどう行動すべきか、避難場所の選定など、日常的に防災を意識するようになりました。

去年の夏にはヤ・シィパークを訪れ、津波避難の重要性や防寒対策の課題を学びました。今年の学習会では避難所運営ゲームを通じて、災害時に高校生として地域に貢献する方法を真剣に考えました。丁寧さとスピードのバランスを取ることの難しさとお大切さを実感しました。

今年の8月には、実践校の代表の皆さんと被災地訪問に参加し、地震の脅威を肌で感じました。地割れや壊れた高速道路などの震災遺構を見て、災害の恐ろしさを改めて認識しました。この2年間の実践校としての活動を通じて、多くの学びと意識の変化がありました。

私たちは今、学びを活かすことができます。「過去の災害から学びを得て、伝えていく」、これが防災を学ぶ上で、大切なことなのではないかと思います。誰も取り残さない、これは難しい目標だと思いますが、皆さんが災害を学び、伝え、防災の大切さを広めれば、いつかきっと達成できると思います。

私はこれからも防災を学び、そして伝えていきたいと思います。今ここに参加している高校生が、それぞれの家庭で、自分の学校で、今日の防災サミットや、これまでの学習会の学びを伝えれば、誰も取り残さないという難しい目標の達成にも、近づくことができるのではないのでしょうか。大切な人を失わないためにも、ここにいる私たちから行動を起こしていきましょう。

簡単ではございますが、生徒代表挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。



山田高等学校3年 松浦 岳飛

高知県高校生防災サミットアンケート結果・感想

参加した生徒・教職員等からアンケートをとりました。(152名から回答)

設問	結果
サミットの内容は、学校での防災活動をすすめるうえで大変勉強になった。	3.8
サミットを通じて、防災について深く考えることができた。	3.9
サミットの内容は、今後の学校での防災活動に役立つと思う。	3.8
本日のサミットに参加して良かったと思う。	3.9

※ 4 : よく当てはまる 3 : 当てはまる 2 : あまり当てはまらない
1 : 全く当てはまらない

「サミットに参加して最も印象に残ったことはどんなことですか。理由も含めて書いてください」

(生徒)

- ・救えたはずの命を救えなかったのは、天災でなく「人災」だという只野さんの講演中の言葉が印象に残りました。確かに「あの時こうしていれば」という気持ちや後悔を感じるということは、その時にその人がした選択で防げたものだったかもしれないと感じ、とても納得しました。その災害で辛い思いやしんどい思いをした人、特に子どもや高齢者をどうやってケアしていくかが今後の課題になると思いました。ワークでやったゲームやケアの基盤を通してそういったケアができるのではないかと感じました。
- ・大川小学校の子どもたちが同じ所要時間で行ける裏山でなく、川の方へ逃げて、たくさんの生徒が亡くなり、生き残った生徒はとても苦しんだということが最も印象に残りました。なぜなら、今考えたら絶対に裏山に行くのにと不思議に思ったからです。災害が起こった時はパニックになり、正常な判断ができないということがとても実感できました。「自然災害」を「人災」にしないよう、防災についてこれからも学んでいきたいと思います。
- ・今回の防災サミットのために代表高校の生徒の方々が何ヶ月も前から準備を重ねて今日この場で発表を聴いて素晴らしいと思いました。みなさんの取り組みがこれからの防災で使われたり、次の世代へ伝えることができたらいいなと思いました。只野さんのお話を聴き、私が思ったことは、只野さんの取り組みが若い世代から広い世代へ届けられると良いなということです。被災を乗り越えた只野さんだからこそできる取り組みをこれから応援していきたいと思いました。
- ・災害に被災したとしても暗い姿をずっと見せるのではなく、前を向いて私たちに伝達してくれた姿に感銘を受けました。私たちはこれまで「TEAM 大川」のような活動をしてきたことはありません。この防災サミットで聞いた話を学校に持ち帰り、後輩や同級生に話そうと思います。
- ・避難訓練は、不安をあおるのではなく、楽しむことが大切だと分かりました。人の選択によって命が決まることが分かりました。理由は、自分の行動で決まるということがその通りだと思ったからです。
- ・「災害関連死」が一番印象に残りました。理由は、地震によって亡くなるだけでなく、避難後の生活の過度な精神的ストレスによって亡くなる人もいると知って衝撃を受けたか

からです。

- ・グループワークがとても面白かったし、一人で考えては出なかったことが友達と話したことで分かりました。また、分からなくても話し合うことが良いんだというお話を聞いて、良い意味で納得しました。個人的にとっても面白いと思ったので親に伝えたいと思ったら、伝えることも素晴らしいんだと言われて少し悔しかったです。実践校さんのお話だったり、Team 大川さんの意見などを聞いたことがすごく心に響き、大川小は「天災ではなく人災」という言葉が印象に残りました。
- ・東日本震災で生きることによって精一杯だった子どもたちの受験模様。生き残ったにも関わらず、周りの大人も精一杯であったため居場所が無い状態から ATM（遊ぶ、食べる、学ぶ）を続けることで回復していき、人とのつながりによって社会復帰に至ったという話が、近い将来の我々を指しているようで他人事に思えなかったからです。

（教員等）

- ・「大川小学校の被害が人災である、というところは、生徒の命をあずかる教員として知識・意識ともに高めていく必要を強く感じました。学校全体に広げていきたいと思います。」
- ・各学校が特色ある取組をしていることが分かりました。津波サミットから防災サミットに名称変更したこともあり、今後は防災や土砂災害等、多方面の実践もあっても良いかと感じました。生の声を聞くことでより防災に対しての学校活動の意義も再認識できました。
- ・実践校での発表を聞いて印象に残ったのは、生徒たちが防災について学ぶだけでなく、学んだことを小学校や地域の方々に伝えたり授業を行ったりしていたことです。学んだことをアウトプットすることで、より自分の中に残るものになると思いました。また、小学校にとっても、教師から学ぶよりも年齢の近い先輩方から話を聞くことで、より深い学びにつながるのではないかと思います。その小学生が高校生になったときに同じように次の世代に伝えていければ…と思います。また、Team 大川のお話を聞き、震災の「負」だけを伝えるのではなく、未来に向けての「希望」を伝えて下さったことは、高校生にとって大切なメッセージになると感じました。
- ・防災訓練は、危機感を持って行うのではなく、安心して安全に避難できるかを確認するために行う…という言葉にはっとさせられました。勤務校でも防災訓練は実施していますが、本日の発表高校の取り組みや只野さんの講話をお聞きしていると、まだまだできることがたくさんあるな…と、とても勉強になりました。ありがとうございました。休憩時間の音楽はやはり良いな…と思いました。素敵な演奏もありがとうございました。
- ・高校生がこのような活動を行っているということを知らなかったのも、とても驚きました。また、活動内容も本格的なもので、今後も継続してほしいと思います。私自身もこれからすべきことや、学生さんたちのために何かできることがあれば…と考えさせられました。チーム大川さんのお話では防災だけでなく、教育や人間形成に関わるお話を聞くことができて良かったです。

令和 6 年度「高知県高校生防災サミット」報告書

発 行 令和 7 年 3 月

発行者 高知県教育委員会事務局 学校安全対策課
〒780-0850 高知市丸ノ内 1 丁目 7 番 52 号
TEL : 088-821-4533
FAX : 088-821-4546

